

ムスリムツーリズムの発展と課題

小林:本インタビューは、わが国の土木学会の関係者の方々に、海外から見た日本について情報を共有したい思いから開始しました。本日は、マレーシア国際イスラム大学の国際ハラル研究研修機構の機構長であるハムザ教授に対談をお引き受けいただきました。今般、日本における海外からの観光客数は止まることを知らず、2020 年の東京オリンピックに向けて、さらに伸びることが予想されます。また、ムスリムの人口は世界人口の 3 分の 1 を占めると言われています。日本へのインバウンドの観光客が 3000 万人になろうとしているなかで、ムスリムの来日観光客はそれほど多くない。とりわけ、観光客 1 人当たりの消費額が多い国は、サウジアラビア、アラブ首長国連邦、インドネシアですが、これらの国々の裕福な観光客が日本にやってくる。中国、韓国や台湾など、近隣のアジアの国々へのムスリムツーリズムが急増する中で、日本の対応が非常に立ち遅れています。今日は、日本に対するムスリムツーリズムが抱える問題点や、ムスリムツーリズムを発展させるための基本的な戦略を考えるために、ムスリムツーリズムに関して造詣の深いハムザ教授と対談する機会をつくりました。ハムザ教授、この度はわざわざマレーシアからお越しいただき、ありがとうございます。



Dr. HAMZAH Mohd. Salleh

Dean International Institute for Halal Research & Training (INHART), International Islamic University Malaysia (IIUM)

【政府主導のツーリズム展開】

小林:マレーシアの首都クアラルンプールは、アラブ諸国をはじめとして世界中のムスリムの旅行者にとって、もっとも人気のある都市であると聞いています。もちろん、マレーシアがムスリム国であること、経済が高度に発展し、質の高いインフラが整備されていること、治安がいいことなどいくつか要因があると思いますが、何がもっとも重要な要因かを教えて頂きたいと思います。まずは、マレーシアのムスリムツーリズムの動向・現状についてお

聞かせください。

HAMZAH : マレーシアでのムスリムツーリズムの展開は、政府主導といっても過言ではありません。

マレーシアは、1) 経済や民族の多様性、2) 緩やかな現代的ムスリム文化の存在、3) インフラ投資という 3 つが揃っているのが強みです。これらの強みを活かした展開を政府が中心となって進めています。



多くのムスリムが訪れる場所と言えば、建築学的に魅力のあるモスクですが、最近では、建物や場所を見学するだけでなく、体験型のツーリズムを展開しており、脚光を浴びています。代表的なモスクでは、ムスリムでない旅行者でも祈りを体験できたりします。この体験型ツーリズムを成功させるために、モスクでは、お祈りの仕方や作法などの注意事項が提示してあったり、スカーフやスカートなど、ノンムスリムへの対応も心がけていたりしています。ノンムスリムは、断食の季節（ラマダン）にマレーシアを訪問する傾向も高いのですが、ノンムスリムの観光客を受け入れる側のマレーシア人が、海外の人々の目からみたムスリム文化や季節を十分に理解するとともに、モスリム文化の継承を行いながら、ムスリムにもノンムスリムにも魅力が感じられるツーリズムの展開を目指しています。

今、申し上げたツーリズム展開をマレーシア政府の観光局が率先して行っています。

【ムスリムツーリズムにおいて大事なものは祈る場所の確保】

HAMZAH : ムスリムツーリズムにとっては、1 日 5 回という祈り時間に祈りを行える場所を確保することが最も大切です。

最近、マレーシアを訪れるアラブからのムスリム女性達は、他の観光客よりも非常に高い買い物を行っています。このような女性達は、祈りの部屋が確保してあるショッピングモールやデパートで買い物をしています。

小林 : マレーシアにはムスリムの旅行者だけでなく、ノンムスリムの旅行者も沢山訪ねます。日本の高齢者がもっとも移住したい国の 1 つとして、マレーシアが常にあげられます。ムスリムの人々も、地域や国によって価値観が多様に違うと思います。このような多様なインバウンドの旅行者が急増したことに對して、マレーシアの人々が違和感を抱くということはないのでしょうか？

HAMZAH : マレーシアの人々は、日本人の方々と同様にとっても親切なのです。ASEAN 諸国だけでなく世界中からの旅行者を喜んで受け入れ、道で迷っている人や困った人がいれば、助けたりします。正確な英語が話せなくても、言語に関係なく、多様性を受け入れる民族なのです。

【重要なプラットフォームの構築】

小林：日本では、ムスリムツーリズムについてほとんどの人が知りません。そのために、ムスリムツーリズムに対する対応が非常に遅れております。中国、韓国や台湾におけるムスリムツーリズムへの対応が進む中で、日本の対応の遅れを懸念しております。まず、ムスリムツーリズムについて簡単に説明していただけますか。

HAMZAH：ツーリズムのサステナビリティ（持続可能性）には、インフラ整備と人的資源（Human Capital）の確保が求められます。マレーシア政府は、それを十分理解しておりますので、観光省の中にツーリズム研修機関を設立しました。我々の研究機構も、ムスリムツーリズム研修機関の 1 つです。



まず、アメリカやヨーロッパでは、ムスリムに対する社会的偏見が強いために、アラブ諸国の人々の旅行先がアジアにシフトしてきているという背景があります。

日本の隣国である台湾では、最近、海外からの観光客数が減少しています。そこで、新しい観光市場開発として、ムスリムツーリズムをターゲットにし、我々に研究開発の協力を求めてきています。このような動きの背景としては、1人1人の消費額が非常に高い彼らを大きな・新たな市場として捉えていることが伺えます。マレーシアでも彼らの1日の消費額は、他の国からの観光客と比較しても、非常に高いのです。

日本も 2020 年の東京オリンピックに向けて、全地球人口の 3 分の 1 であるムスリム、特に、1 人の個人あたりの消費額が大きいアラブ諸国のムスリムを 1 つの市場として捉える時期であると思います。この観光市場に対する大きな変革は難しいかとは思いますが、まずは、主だった幾つかの観光地をターゲットにして、ムスリムに対応できるように徐々にしていけば良いと思います。

但し、日本は、何も新しいことに挑戦しなくても、海外の観光客を惹きつける素晴らしい文化や風習が存在します。見せる観光だけでなく、体験する観光へとシフトしていくべきでしょう。

小林：今の日本は、ムスリム自体をよく知らず、多様な観光客を受け入れているという段階にあります。ハラールに対する理解が非常に少ない。ハラールといえば、豚肉が禁止されている、ト殺の方法がムスリムの教えに従っていないといけない、くらいの知識で終わっている。食物の輸送方法や調理方法がハラールでないといけない。ホテル、化粧品、交通手段、日用品や

その廃棄方法までハラルの対象になっているということまで考えが及ばない。例えば、日本食。そのベースとなる「醤油」1つをとっても、その成分の中にアルコールが含まれているので、ハラルであるかどうかの判断は微妙なのですね。このようにハラルに関する知識が非常に乏しい状況にあります。また、ハラルに対する偏見もあるかと思います。まずは、ハラ



ルに関して興味を持つところから始めないといけない。ムスリムツーリズムを振興させるためには、例えばハラルレストラン、ハラルホテルなど、ハラルに関する情報を共有できるようなプラットフォームの構築が急がれる状況にあります。

HAMZAH: 現在、韓国のハラルフードを製造する会社に対し支援をしているコンサルタントからも同様の質問をされました。「醤油」に含有されるアルコールの基準値が、規定基準よりどうしても高くなってしまおうというのです。

ムスリムの人々は、必ずしも、アルコールの含有量の許容範囲としての値にこだわっているわけではありません。例えば、ムスリム科学者の見解では、アルコールが発酵や熟成段階でできてしまった副産物と考えれば、すこしぐらい基準値から高くても許容されます。他にも、含有材料のリストを科学者が注意深く解析すれば、許容される場合もあるのです。

日本や韓国、中国がムスリムに対応するためには、まずは、食品の含有材料の表示リストを英語で表記することではないでしょうか。そうすることによって、我々の方で、理解および、選択を行うことが十分にできます。

【ダイバーシティ社会の構築のために】

小林: いままで、日本を訪問するムスリムの旅行者の話をしてきました。反対に、日本人が観光や仕事のためにムスリムの社会を訪問したり、滞在したりする機会が急増しています。われわれのようなノンムスリムが、海外のムスリム社会で仕事をし、居住するためにはどのような心構えや準備が必要ですか。

HAMZAH: 準備と言うよりは、自分にとって新しい文化、特に地域文化を理解することが、まず先決でしょう。それと同様にホスト国も、外部から来た人々の文化を理解する相互的關係が必要です。

なお、ムスリムといっても、マレーシアとアラブ諸国では許容される内容が全く違います。ですので、同じムスリムの場合でも、同様に相互理解が必要なのです。

小林: ASEAN 諸国は多様な民族が共存する「パッチワーク社会」と考えます。多様な民族や宗教が異なる人々が暮らす中で、ムスリムの人々は暮らしている。ほとんどすべての

人々がムスリムであるような国や地域で暮らしている人々とは違う生き方をせざるを得ない。そのことが、マレーシアやインドネシアにおいて、国家が主導してハラール認証という制度をつくりあげる背景になったと思います。ASEAN 社会という多様性の中で生きていくムスリムの人々がどのようにアイデンティティを確立しているのか、非常に興味があります。

HAMZAH: ムスリムといっても、サウジアラビアとマレーシアでは全く違う風習もあるのです。特に、女性の社会的立場が全く違います。アラブの国々では最近になって女性が自動車を運転できるようになりましたが、マレーシアにおける女性の社会的・政治的立場は非常に強いものとなっています。多くの女性が、重要な職務についています。宗教は個性の一部であり、文化はそれぞれ異なりますが、ムスリムは宗教に対する意識が高いと考えるだけのことです。

小林: 大学でもムスリムの留学生が増加しています。ムスリムの留学生たちは、日本というノンムスリムの国で生活し、圧倒的大多数のノンムスリムの学生と一緒に勉強し、研究を行わなければならない。さらに、大学には、ムスリムだけでなく、多様な宗教や文化的背景をもったノンムスリムの留学生もやってくる。このような多様な価値観や考え方を持つすべての学生たちが十分に満足できるような教育・研究環境を提供することは、実質的に不可能だと思います。日本の大学がムスリムの留学生を受け入れ始めた頃には、研究・教育の現場においてさまざまな悩みやトラブルが発生しました。このような時代と比較して、ムスリムの留学生をとりまく環境は大幅に改善されたとは思いますが、当然まだまだ不備な点があると思います。ムスリムの留学生が抱えている問題について何かアドバイスなどはございますか。また、わが国が変わらなければならないことはありますか。

HAMZAH: 先程お話しをしましたように、留学生は自分が暮らしている国の素晴らしいところを相互に学ぶことが重要です。学生達には、大学で受ける講義だけでなく、社会や地域の人々と交流を持ち、知識以外の文化や風習を学んできなさいと伝えています。

特に、日本人の時間に関する正確さ、正直で親切なところやシステム化された社会など、非常に学ぶ価値の高いものだと考えています。

日本で学ぶべきものは知識だけでなく、日常生活を通じて多くあると考えています。是非、多くの国から日本に学びに来てほしいと願いますが、問題は、ムスリムの人々にとって、お祈りをする場所が少ないことでしょうか。ムスリムにとって、1日5回の祈りの時間は非常に大切なものです。ですので、先生方も講義やゼミの時間においても、祈りの時間を考慮して、5~10分ほど抜けても良いなどと柔軟に対応していただければと思います。

また、昨日の私の経験ですが、学生用の食堂にもベジタリアンやヴィーガンのメニューはありますが、ハラールメニューがほぼないこと、また、ベジタリアンメニューがある食堂も限られていました。そのため、なかなか、食事をする場所が見つからず苦勞しました。このような状況では、学生の教室までの移動時間が有効に使えないという問題もあるため、是非、ハラール情報や食事場所も増やしてほしいと感じました。

但し、すべての食堂をハラール対応にすべきであるとは申し上げていません。台湾では、10階

建てのホテルの 2 階部分だけをムスリム対応にするなど、ターゲットを絞って少しずつ対応を行っています。また、百貨店やショッピングモールでは、買い物の消費額が高いアラブ諸国の女性のために、小さなお祈り場所を確保しておくようにすると良いと思います。

全てについて対応するのではなく、いくつかターゲットを絞ってということの問題ないです。それをムスリム用のガイドブックに掲載すれば良いのです。そして、そのデータを調査・分析すれば、ムスリムに対応するということが、如何に経済効果が高いかということが証明され、ムスリムツーリズムは必ず広まっていくはずで

小林：土木学会は社会のインフラの整備・高度化を担っている学会です。社会のグローバル化の中で、さらに付加価値の高いインフラをどう整備していくのか、あるいは既存のインフラを利用してさらに付加価値の高いサービスを生み出していくのかが問われています。ツーリズムは1つの企業や組織、1つのインフラだけで実現できるものではありません。さまざまなインフラを活用してツー



リズムサービスという1つのビジネスモデルを作り上げていく必要があります。このような組織を越えたインフラの協調戦略は、日本が苦手とするところでした。ムスリムツーリズムは、その1つのケースとして非常にポテンシャルの高い領域だと思います。このような複合的な領域に果敢に取り組むこと、それが産学官民連携の「場」としての土木学会の1つの役割だと考えています。本日は、遠路マレーシアからお越しいただきまして有難うございました。